

骨・軟部腫瘍の鑑別診断は画像診断医が遭遇する課題のひとつであり、画像診断医の腕が奮える分野の典型である。これを扱う特集は時にみられるが、本特集は其中でも、骨・軟部腫瘍の画像診断を最も大きく扱ったもののひとつだろう。

骨・軟部腫瘍は一般的には間葉系腫瘍であり、臓器に発生する上皮性腫瘍とは異なる特徴をもつ。骨・軟部腫瘍の種類はきわめて多いが、個々の頻度は一部を除いて少なく、時に生命予後を左右するような振る舞いをする腫瘍が、鑑別診断のわずかな知識で診断されることがある。

骨腫瘍の概念の構成は、1958年に発行されたJaffeの教科書で既に今日とほぼ同様の概要が示され、比較的安定した考え方として維持されてきている。そして、骨にみられる単純X線所見が鑑別診断にかかわることが知られている。骨に発生する腫瘍は、骨や軟骨の発生にかかわる間葉系腫瘍だけではなく、上皮性腫瘍、いわゆる癌の骨転移であったり、造血器由来の腫瘍であったり、これら別系統の腫瘍も日常診療では大きな割合を占めている。さらに、顎骨では歯牙の原器から発生する腫瘍が別の概念として分類されており、また、顎骨には他の部位の骨腫瘍と類似する名前でありながら、異なる性格の病変も発生する。

一方、軟部腫瘍は間葉系組織と末梢神経から発生した腫瘍であり、最近の免疫組織化学や遺伝子の情報を元に再度、再再度の概念の変遷を経ているものが含まれている。これらの種類や画像所見の多様な、あるいは非特異的な画像所見をもつ腫瘍群からも、多くの鑑別診断の可能性が加わって、画像診断医泣かせの軟部腫瘍が数多く存在する。さらに、皮下に進展した皮膚腫瘍のように、画像所見からは軟部腫瘍とは区別できない腫瘍も含まれる。これらの皮膚腫瘍は別系統の腫瘍群に属している。

骨・軟部腫瘍の画像診断はCT・MRIの導入・普及とともに着実に発展し、日常臨床に必要な知識が大きく増加している。本特集で取り上げたのは、“鑑別診断に的を絞って、鑑別診断にかかわる組織像・放射線画像を比較的簡便な記述でまとめ上げたもの”である。本書は日常臨床で鑑別診断を考えるに際して、また通読して知識を深めるためにも、期待に応えられる内容を十分に含んでいると考える。

我々は今後も骨・軟部腫瘍の診断のさらなる変遷に直面するだろうが、日常臨床における骨・軟部腫瘍の画像情報の重みは、この先も変わることはないと考えている。

2019年1月

岩手医科大学医学部放射線医学講座

江原 茂